

横山信義

Nobuyoshi
YOKOYAMA

じようらん
擾乱の海 1

沈黙の真珠湾

擾乱の海1

沈黙の真珠湾
常州人子山書館
章藏

横山 信義

学研M文庫

じょうらん うみ
擾乱の海 1

ちん もく しん じゆ わん
沈黙の真珠湾

よこやま のぶよし
横山 信義

学研M文庫

2012年7月24日 初版発行

●
発行人——脇谷典利

発行所——株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元——株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

© Nobuyoshi Yokoyama 2012 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは——編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター「擾乱の海1」係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。

Tel 03-6431-1002 (学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター TEL 03-3401-2382

<http://www.jrrc.or.jp> E-mail: jrrc_info@jrrc.or.jp

Ⓔ 〈日本複製権センター委託出版物〉

目 次

[序 章]		4
[第一章]	途絶の日	11
[第二章]	暁光の彼方	56
[第三章]	二つの戦場	90
[第四章]	迫りくるもの	161
[第五章]	オアフ島沖海戦	220
[第六章]	届かざる凱歌	340
[第七章]	シンガポール混沌	351
[第八章]	東洋艦隊出撃	385
[第九章]	海鷲迷走	403

擾乱の海1

沈黙の真珠湾

横山 信義

学研M文庫

この作品の一切は架空のものであり、実在の人物、設定などに類似する点があっても、それらはすべてフィクションであることを、あらかじめお断りいたします。

目 次

[序 章]		4
[第一章]	途絶の日	11
[第二章]	暁光の彼方	56
[第三章]	二つの戦場	90
[第四章]	迫りくるもの	161
[第五章]	オアフ島沖海戦	220
[第六章]	届かざる凱歌	340
[第七章]	シンガポール混沌	351
[第八章]	東洋艦隊出撃	385
[第九章]	海鷲迷走	403

序章

冬の柔らかな日差しの下に、その艦はあった。

前方に向けて、大きくうねり上げる艦首。

異様なまでに太い中央部。

前部に二基、後部に一基が配置された三連装の主砲塔。

すらりと伸び上がった艦橋と、その後方に連なる煙突、後檣。

艦橋構造物を囲むように配置された副砲と高角砲、機銃。

艦尾に据え付けられた、二基の射出機。

全長二六三メートル、全幅三九メートル、基準排水量六万四〇〇〇トン。

主砲は、四五口径四六センチ砲。

日本帝国海軍最強にして最大の戦艦、そして世界の戦艦の中でも、最強の玉座に君臨することを約束された戦艦。

「大和」が今、その生涯の中で最初の、そして最も重要な戦いに臨まんとしていた。

「主砲、左砲戦！」

艦長高柳儀八大佐の落ち着いた、力強さを感じさせる声が、艦橋トップの射撃指揮

所に伝えられた。

「砲戦距離三二五サンフタゴ（三万二五〇〇メートル）。左九〇度、一斉撃ち方用意！」

砲術長松田源吾中佐が、凜とした声で命令した。

丈高い「大和」の射撃指揮所から、直径一五センチの望遠鏡を用いても、目標の形状はほとんど分からない。

水平線付近に、黒い小さな影が見えるだけだ。

「大和」の主砲塔は左に旋回し、九門の砲身が大きく上向けられる。

その動きが止んだ。

「測的よし！」

「方位盤よし！」

「主砲射撃準備よし！」

射手村田元輝特務少尉、旋回手家田政六兵曹長、動揺手竹重忠治一等兵曹の動作に無駄は一切なく、声にもよどみはない。

帝国海軍最強の戦艦の砲術科員として、特に選び抜かれた優秀な者たちが、「大和」のメカニズムの一部と化したかのように、九門の巨砲を操っている。

「撃ち方始め！」

松田の口から、裂帛の気合いが飛び出した。

主砲の発射を告げるブザーの音が、全艦に鳴り響いた。

それが終わると同時に、九門の砲口から、紅蓮ぐれんの炎がほとばしった。

冬の柔らかい日差しどころか、真夏の直射日光とさえ張り合えそうなほどの巨大な火焰かえんだ。太陽が、海面まで降りて来たかのようなだった。

斉射せいしやのときには、各砲弾の衝撃波が他の砲弾に干渉することを防ぐため、各砲の発射の順番に、〇・三秒の差がつけられている。

だが、重量一・五トンの四六センチ砲弾を、音速の二倍以上の初速で叩たたき出した瞬間の砲声は、その時間差を超えた。

砲声は一つに合わさり、落雷に数倍する大音響となって、海面に轟とどろいた。

射撃指揮所にこもる松田砲術長は、脳天のうてんから爪先つまさきまでを貫き通す衝撃を感じ、艦橋の高柳艦長は、固化した大気に顔面をはたかれたように感じた。

「五秒経過……一〇秒経過……」

松田の近くでは、水兵がストップウォッチの針が示す数字を読み上げている。

今、蒼空そうくうの中を九発の巨弾が、目標目がけて飛翔ひしやうしているのだ。

四〇秒近くが経過したとき、

「用意——」

第一砲塔の砲員が、弾着が近いことを報しらせてきた。

各砲塔には弾着時計があり、引き金が引かれると同時に作動する。砲戦距離に応じた弾着時を、砲員が報せることになっている。

「だんちゃーく！」

の聲が飛び込んだ。

同時に松田は、水平線付近の海面が大きく盛り上がる様を見た。

「……！」

声にならない叫びが、喉の奥から飛び出した。

九本の巨大な水柱が、天に向けて突き上げられた白い槍のように、高々と奔騰している。

太さ、高さとも、これまでの戦艦とは比較にならない。竣工以来、帝国海軍最強の戦艦として君臨してきた「長門」の四〇センチ砲弾が噴き上げる水柱に比べて、倍はありそうだ。

それを見るだけでも、「大和」の主砲が尋常ならざる破壊力を備えていることがわせた。

やがて水柱は崩れ、大量の海水が海面を叩いた。

弾着時のおどろおどろしい音が、「大和」に届いた。

松田は、水平線付近を観察した。

目標の姿は、完全に消失している。

「敵艦轟沈！」

松田は右の拳を打ち振って叫び、その後、笑いながら付け加えた。

「ただし、これが実戦であれば、だがな」

九門の四六センチ主砲は、全て正常に作動した。

「大和」にとり、最初にして最も重要な戦い——周防灘における四六センチ主砲の公試は、満足できる成果を収めたのだ。

艦橋では、高柳艦長が、通信長野崎虎雄中佐を呼び出している。

「観測点からの報告は、受信できたか？」

「できません。電波状態は、一二月三日以降、全く変わっておりません」

いかにも申し訳なさそうな声で答えた野崎に、高柳は苦笑しながら言った。

「貴官の責任ではないのだから、気にする必要はないさ。しかし、本艦の通信機をもつてしても駄目か。僅か三万メートル先との交信も不可能か」

「通信機の性能が、問題ではないと思います。そもそも、我が国だけで起きている現象ではありませんから」

「致し方あるまい」

高柳は受話器を置き、傍らに控える呉海軍工廠の造船部長庭田尚三少将を振り返つ

た。

「観測点からの報告は、受信できません。電波の状態は、一二月三日以来、変化がありません」

「分かった。観測点のデータは、後で工廠に届けて貰おう」
庭田は頷いた。

観測点の報告がないことに、さほど不満そうな表情は見せていない。

たった今の斉射を見ただけで、「大和」の主砲公試が成功であると確信したのだらう。

（主砲の公試は、確かに成功した。が……）

高柳は、空を見上げた。

普段と変わることのない、冬の瀬戸内^{せとうち}の空だ。空の色にも、太陽の光にも、ところどころにかかるちぎれ雲にも、おかしいところは全くない。

だが、その空が、「大和」から——いや、艦船、航空機、地上施設を問わず、電波を使用する全世界の機器を、使用不能に陥^{おとし}れている。

現代の戦争には不可欠の、「耳」と「口」を奪っている。

「大和」の四六センチ主砲が、三万メートルを超える長大な射程距離を持つことは、たった今の公試で証明されたが、その射程距離がこの状況下で、どこまで威力^{いりよく}を発揮

できるのか。

帝国海軍は、遠距離の砲戦には不可欠の、航空機からの弾着観測すら行えないのだ。それらを考えると、主砲公試の成功を、手放しでは喜べなかった。

昭和一六年一二月七日。

日本で「異変」が観測されてから四日後、そして運命の転回点を目前に控えた日の、午後二時過ぎだった。

第一章 途絶の日

1

「おはようございます、皆さん。朝七時のニュースをお送りします」
ホノルル放送局のアナウンサー、キングストン・ケリーは、マイクに向かって喋つた。

一九四一年一月二日の早朝だ。

夜は既に明け、空からは陽光が燦々と降り注いでいる。

バナナ農園やパイナップル畑では、従業員が仕事にかかっており、カネオヘ湾からは、漁船が出港を始めている。

軍港がある真珠湾では、戦艦や空母の甲板に水兵が上がり、モップをかけている。常と変わらぬ、ハワイ・オアフ島の朝だった。

ケリーは最初に、急速に悪化している合衆国と日本の外交関係に触れ、國務長官コデル・ハルより駐米日本大使野村吉三郎に手交した合衆国政府の通告文に、未だに日本政府からの回答が届けられていない旨を話した。

次いで、ヨーロッパにおける戦況について話し、モスクワ前面で独ソ両軍の激戦が展開されていること、北アフリカ戦線のイギリス軍が、ドイツ・アフリカ軍団を押し戻し、トブルクの解放に成功したことを報道した。

国際ニュースに続いて、国内ニュースを一通り伝え、それが終わったところで、ハワイ準州のローカルニュースと気象情報を担当するストレンガー・オルソンに代わった。

ケリーが放送室の外に出たとき、電話交換室から、複数の人間の叫び声が聞こえてきた。

電話の呼び出し音も聞こえてくる。

いちどきに、多数の電話に応答している様子だ。

「こんなに早くから、どうしたんだ？」

ケリーは首を傾げた。

朝七時から、一度に多数の電話がかかって来るなど、ただごとではない。

昨夜の番組に、クレームが出たのか——と呟いた。

放送局が、番組へのクレームどころではない、のっぴきならぬ状況に置かれていることは、すぐに分かった。

各所から、多数の人間が上げる叫び声や怒号どごうが聞こえ始めたのだ。

局全体が、騒然^{そうぜん}となり始めている。

「どうしたんですか？ 何かトラブルですか」

足早^{あしはや}に行き過ぎようとした制作部長のエディ・ギルバートを呼び止め、ケリーは聞いた。

「トラブルだ。それも、ホノルル放送局始まって以来の大トラブルだ」

ギルバートは、苛立^{いらだ}ちと怒りを露^{あら}わにしながら言った。

「いったい何が……？」

「電波が止まっちゃまったんだ」

「何ですって？」

「出でないんだよ、放送局の電波が。正確には、電波は通常通り発信しているが、どこの家のラジオにも受信されてないんだ」

ケリーは絶句した。

先に自分が読み上げた米日交渉やヨーロッパ戦線についてのニュースは、聴取者には届いていなかったということか。

「今、技術部が原因を調査中だ」

ギルバートは、ケリーの肩を軽く叩^{たた}いた。「原因が分かるまで、待機していてくれ。技師連中の尻を叩いて、なるべく早く放送を再開できるようにすると、技術部長も言